獲るだけの漁業からの脱却
－佐々波プラン－

佐々波鰤網協議会
大　畠　　要

1　地域の概要

私たちの住む七尾市は、石川県能登半島の中程に位置し、古代より能登の政治・経済・文化の中心地として発展を続けてきました。

平成１６年１０月１日には、旧七尾市、田鶴浜町、中島町及び能登島町の１市３町が合併し、新生七尾市となり新たな一歩を踏み出したところです（図１）。

私たちは、七尾市南西部の富山湾に面した佐々波漁協に属し、古くから定置網漁業を行っています。

漁協は正組合員７７名、准組合員７１名で定置網漁業の他は、刺網、採介藻が行われていますが、水揚げの９割以上が定置網漁業によるものです。

2　漁業の概要

定置網は、佐々波沖に敷設し、周年操業しています。

操業は、午前４時半から、総勢５２人が７隻の漁船に分乗して行っています。

定置網の構造等については、長さ３㎞、幅２㎞、水深約５０～１００ｍの海域に図２のように海岸線に対し垂直な形で３階建てに敷設し、沖から順に１号、２号、３号網と呼んでいます。

網の仕組みは、１号網は両落網で、２、３号網は片側２段落網とし、落網には大漁に漁獲された魚を一時蓄養をする通称「金庫」網を併設しています。

主な漁獲物は、回遊魚を主体にカタクチイワシ、ブリ、アジ、スルメイカなどで、平成１６年度の年間水揚げは約２，５００トン、９億３千万円でありました（図３、４）。

このうち特に冬場に水揚げされる１０ｋｇ以上のブリについては、寒ブリと称し、高値で取引され、水揚げ高の大きなウエイトを占めています。

3　研究グループの組織と運営

私たちの協議会には、安全衛生、環境美化、さざなみ市、品質管理及び風紀の５つの委員会があり、定置網関係者全員がいずれかの委員会に属し、毎月１回各委員会が開催されます。

さらに、翌月上旬には全員が参加して協議会が開催され、各委員会からの報告がなされます。

各委員会は、年配の人が委員長を務めますが、協議会での報告は、各自の自覚を促すため発表者は交代させています（図５）。

4　研究・実践活動取組課題選定の動機

私たちの定置網は、構成員の高齢化、休みの日も計画的ではなく、とりわけ若者には魅力が感じられない職場環境でした。

また、「漁師は魚を捕ってなんぼ」という考えの強い人が多く、バブル崩壊後一段と厳しくなった魚価安の中で、組織の活力が低下しており、何らか活性化策が必要でした。

そこで、こういった状況を打開するために、上述の委員会制が導入されました。

委員会発足当初は、何をすればいいのかわからず、年配の人と若手の間でも考え方に違いもありなかなか機能しませんでしたが、操業時のヘルメット装着や漁港内の美化など、身近な課題から取り組むことで少しづつ機能し始めました。

また、若手も、提案した祝日の勤務時間短縮が認められるなど、少しづつ発言が出来るようになっていきました。

そして、ベテラン組は、若者の気持ちや改革の必要性を理解するようになり、若者は経営に参画しているという自覚も芽生え始め、幾つかの取り組みを開始しました。

5　研究・実践活動の状況及び成果

（1）研究・実践活動の状況

1）鮮度保持向上

① 先端機器の導入

鮮度保持の向上を図るため、平成１３年に県内で初めて流動氷製造装置を導入しました（写真１、２）。

この流動氷は、従来の砕氷に比べ、海水から作るため塩分低下が無く、また、冷却能力も高く、特に高水温などの時の冷却には効果を発揮します。

ただ、冷却能力が高い分、魚体などが白色化することもあります。

このため、時期、魚などの状況や使用中の水温管理が重要で、最近ではようやく効果的に使用できるようになりましたが、最初の頃は変色するケースもありました。

また、衛生面においても、平成１５年に殺菌冷海水装置を導入し、流動氷の製造や船やタンクなどの洗浄にも使用することとなりました（写真３）。

② 選別の正確・スピード化

鮮度の向上には、陸上での作業の迅速化も重要です。

これまで魚種によっては、選別を２種類にしていたため、選別に迷い、時間を要することもありました。

そのため、選別を３種類に増やし、さらに、かごを色分けすることで、作業の迅速・正確さの向上を図りました（写真４）。

2）漁港内の環境・衛生美化

若者は釣りでもしない限り漁港には来ません。これは、漁港は汚く、悪臭がするなどのイメージがらだと思います。

漁港の役割を考えますと、１つは生産活動の場であり、もう一つは地域のコミュニティーの場だと思います。

そこで、生産活動の面では、消費者に食べ物を提供する立場の者であることを再自

覚し、漁港内の環境・衛生対策を強化するため、網仕事の後の整理整頓はもちろん、草刈りなども定期的に行い漁港内の環境美化に取り組みました（写真５、６）。

また、魚の水揚げ選別終了後も、魚の臭いが漂わないよう、船、タンク、選別機なども念入りに水洗いし、タンクにつても整理して並べ置くようにしました。

さらに、コミュニティーの場としても、殺風景な漁港内に明るさや潤いをだすために、県内の大学に依頼し防波堤に壁画を制作してもらいました。

現在１５２枚の壁画が描かれています（写真７）。

３）さざなみ市での消費者との交流

毎月第三日曜日の午前７時から、その日に獲れた鮮魚を即売する「さざなみ市」を平成１３年から開催しています。

鮮魚の売り上げは、定置網の水揚げに比べれば非常に少ないですが、全員が販売員となり消費者との交流や地域振興、地産地消を目的に実施しています。

市の開会に当たっては、若手の一人がお客さんの前で当日の魚の種類、値段などを説明し始めます（写真８）。

売り上げは減少傾向ですが、地元にスーパーがないことや地物ということから年配の方を中心に好評で、鮮魚については開始後は消費者と会話も出来ないほどの勢いで、１５分ぐらいで大方が売り切れるほどの盛況ぶりです（写真９）。

また、地域の農家の方などにも、生産した果物や野菜などを販売してもらえるよう、参加してもらっています（写真１０）。

４）佐々波塾の開校

これからの漁業者は、幅広い知識を身につけることで、違った角度から漁業を見れたり、また、豊かな人生を送ることにもつながり、このような目的から委員会とは別に、平成１３年に佐々波塾が開校し全員が参加してテストや研修等を実施しています。

①　ペーパーテストの実施

テストは毎月１回行われ、問題は、協議会幹部の塾長が、漁業、一般教養及び協議会での取り決めなどの３項目から合計５０問の記入式問題を作成しています。

結果については番屋で公開しています（写真１１、１２）。

②　研修会、講習会への積極的な参加

漁業関係では、県、民間会社などが開催する鮮度、網などの講習会へ参加しています。

また、一般教養では他分野で活躍されている専門家を招いた研修会も実施しています。これまでに、県内の大手酒造メーカー社長、女性アナウンサー及び大学教授などを招いています（写真１３、１４）。

（２）成果

１）相対的な高価格の取引

近年魚価の低迷により、魚の単価は低調ではありますが、流動氷や殺菌海水の使用作業の迅速化などにより他の定置網より高い価格で取引がされています（表１）。

特に、鮮度管理が大変な夏場の６～９月にかけて、氷見漁協へ出荷した魚種のうち、６０％近い魚種が平均単価を上回り、鮮度を高く評価されています。

２）組織の若返り

職場環境の改善が進み、定置網への就業を希望する若者が増え、採用試験も実施するようになりました。その結果、現在の職場の平均年齢は４４．２歳となり平成１１年に比べて４．３歳若返りました（図７）。

若い人が増えてきたことで、職場の雰囲気も明るくなり、年配の方も若手には負けまいと刺激を受け、一段と仕事に対し積極的になるなど活性されたと感じます。

３）若者の抜擢

私たちの定置網は、これまで漁労長や船長のような重要なポストは、経験豊富な年配の人が担っていました。

しかしながら、平均年齢の若齢化、若手の育成及び意欲の向上に対応するために、平成１７年から２０代である私が、本船の船長を努めさせてもらうことになりました。

最初の頃は、漁労長の思うような操船に応えられず、毎日緊張の連続でした。

現在も技術的にはまだまだですが、期待に少しでも、また早く応えられるよう、今後も努力していきたいと思っています。

４）社会勉強の充実

佐々波塾の開校により始まった社会勉強ですが、最初の頃はいやいや受けていましたが、テストの結果が公表されると競争心に火がつき、講習を受ける姿勢も真剣になってきました。そのかいあって、平均点も開始当初に比べ徐々に上がり教養も身についてきました（図８）。

６　波及効果

１）釣人のマナー向上

週末や休日になると漁港内に釣人が訪れます。特に秋はアオリイカ釣りに５０人ぐらいが夜明け前から訪れます。

しかし、港内をきれいにしてあるため、港内にゴミを残す釣人はほとんどいません。

２）余暇の充実

定期的な休日が増えたことから、家族とのふれあい、趣味の時間などの時間に幅がもてるようになりました。

さらに、祭礼などの地域活動などにも参加が容易になりました。

３）テレビ取材

さざなみ市の開催や研修講師にアナウンサーを依頼したことがきっかけにもなり、寒ブリのシーズンにもなると地元テレビ局はもとより、平成１４年以降全国放送の番組にも取り上げてもらえるようになり、少しは佐々波の寒ブリが全国へ発信されたと

思いました。

7　今後の課題や計画と問題点

1）漁労技術力の強化向上

平均年齢が低下した反面、近々５０代のいわゆる団塊の世代が現場を去ることから２０代、３０代個々の漁労技術の習得・向上が急務となっているます。

ロープワーク、網修理はもとより、天気や潮の流れの見方などさまざなま技術の習得が必要となります。

2）資源管理の推進

私たちは、先輩方から引き継いできたこの漁場を、今後も守り、引き継いでいかなくてはなりません。

一方、全国的には、網目の拡大などにより小型魚の保護など資源管理に取り組んでいる定置網も見受けられるようになってきました。

私たちも、取り組んでいかなければならない課題だと思っています。

3）ブリの全国発信

現在、消費者は「氷見のブリ」は知っててても、その中には、佐々波で獲れたものがあるとは、ほとんどの人が知らないと思います。

現場で働いている我々にとっては、ある種寂しさ、もどかしさを感じます。

現在、七尾・能登島定置網漁業振興会や独自のＨＰでＰＲしていますが、さらに今後は、新しくできた地域名をいれた商標登録制度なども研究しながら佐々波のブリを全国に発信していきたいと思っています。

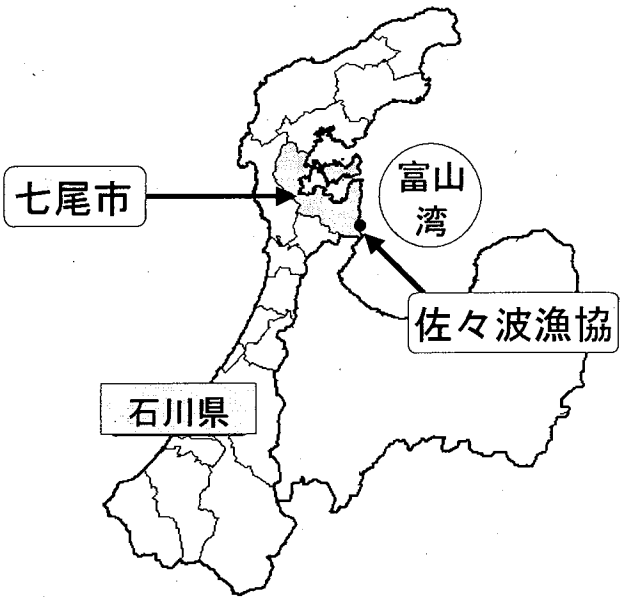


図１　位置図

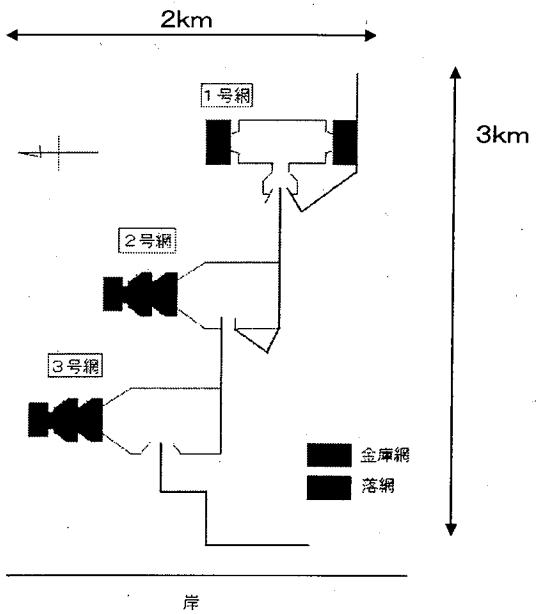


図２　定置網の構造等

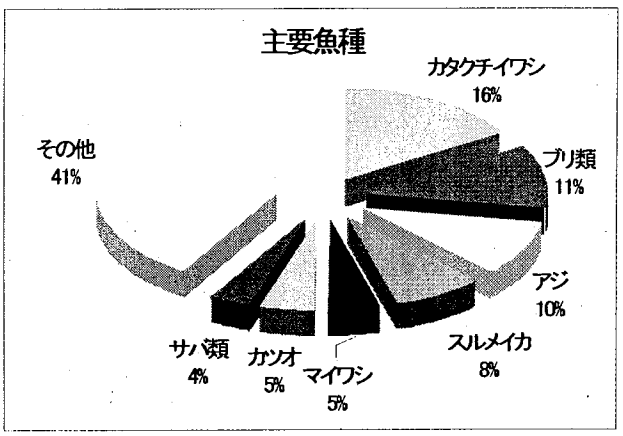


図３　主要魚種

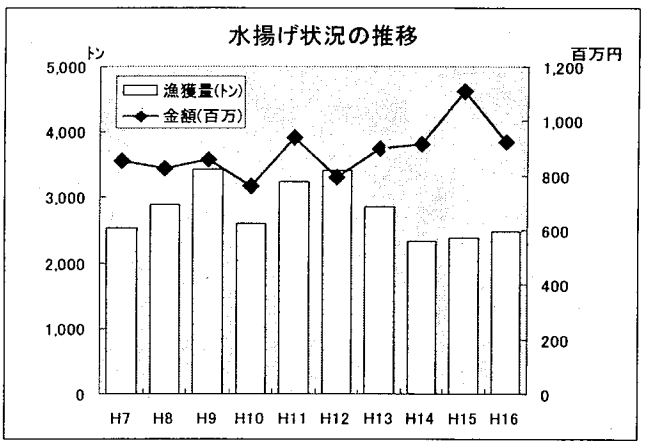


図４　水揚げ状況

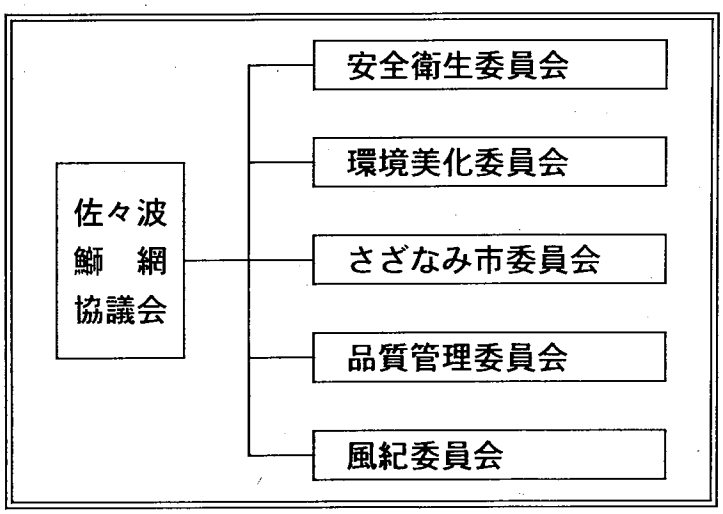


図５　組織図

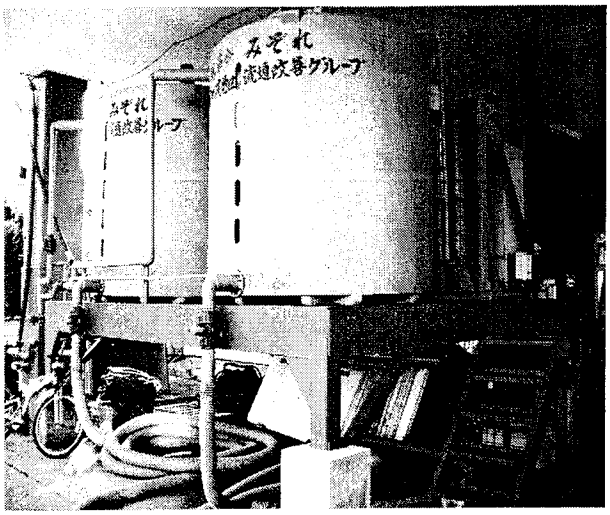


写真１　流動氷製造装置

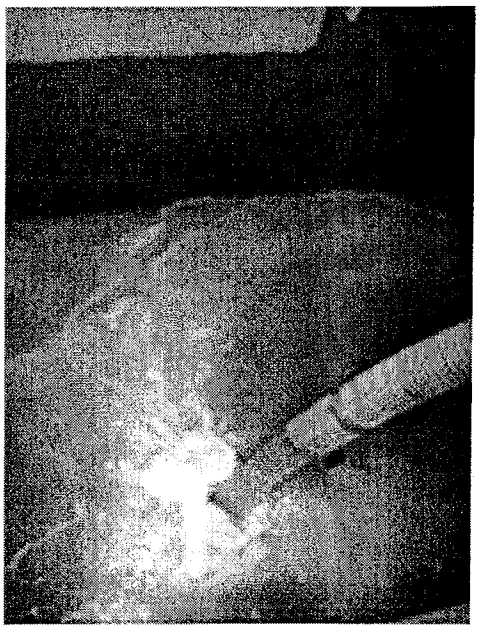


写真２　流動氷

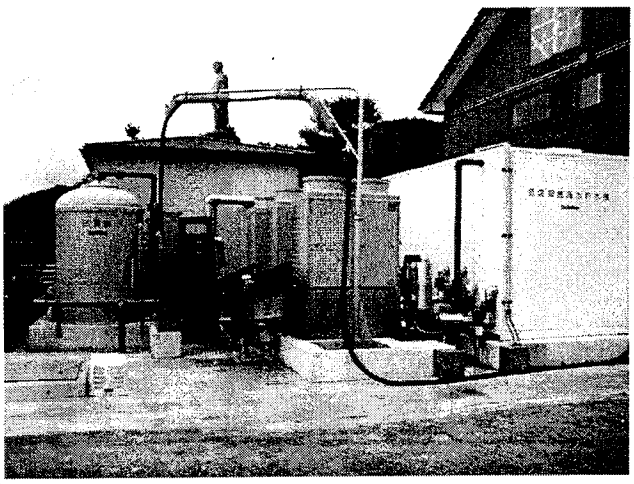


写真３　殺菌冷海水装置

写真４　色分けされたかごによる選別

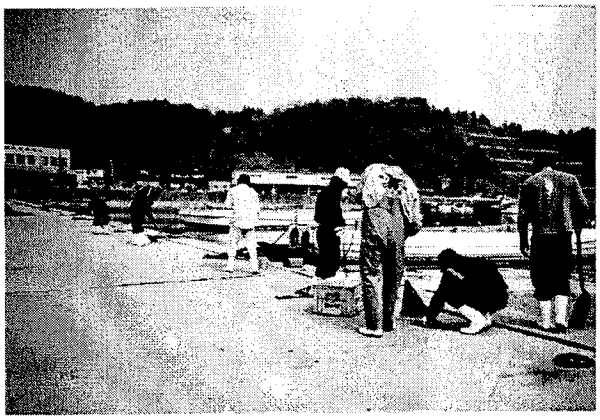


写真５　清掃風景

写真６　草刈り風景

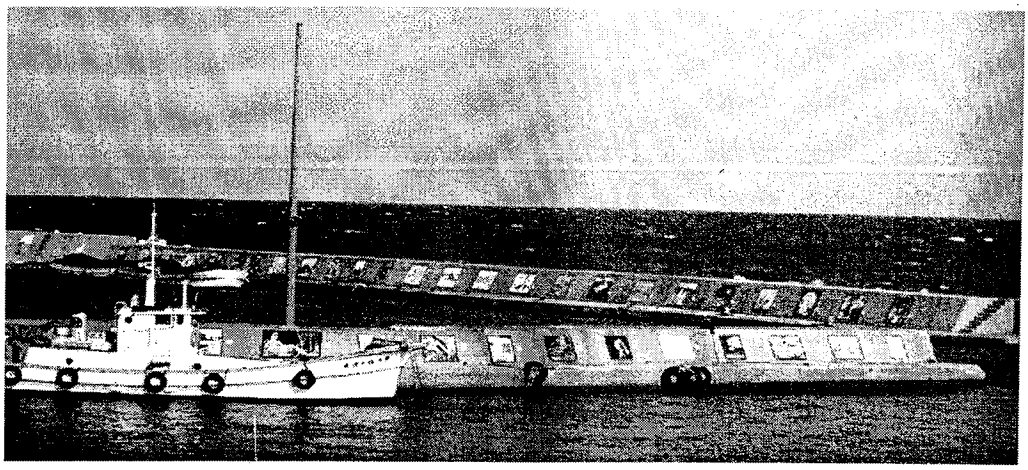


写真７　港内の壁画風景

写真８　開会時の説明

写真９　販売風景

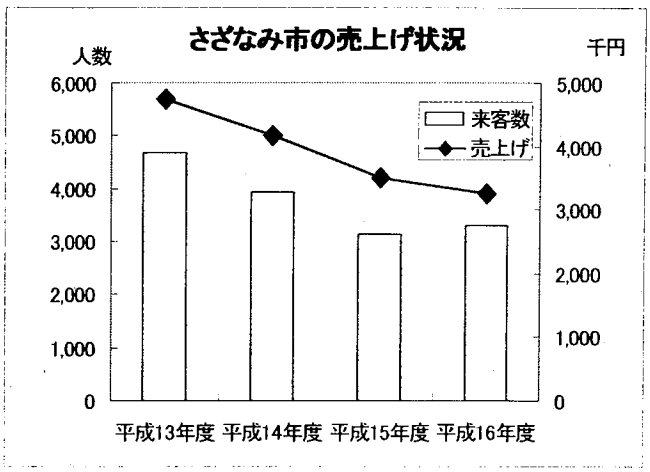


図６　さざなみ市の売り上げ

写真１０　農産物の販売

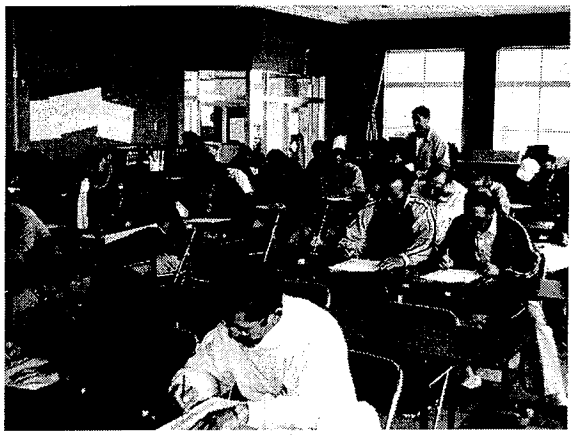


写真１１　テスト風景

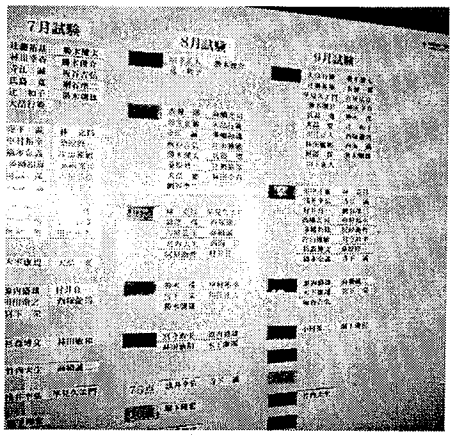


写真１２　結果の公表

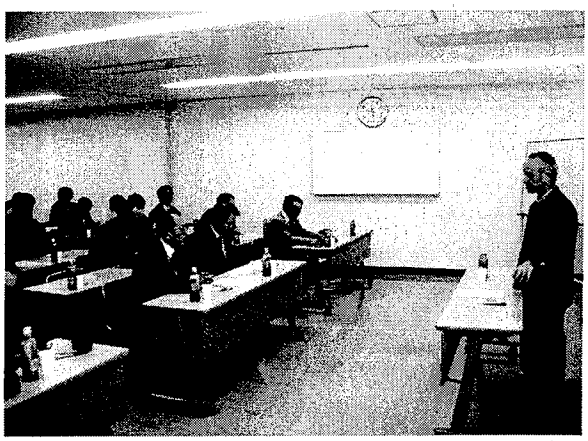
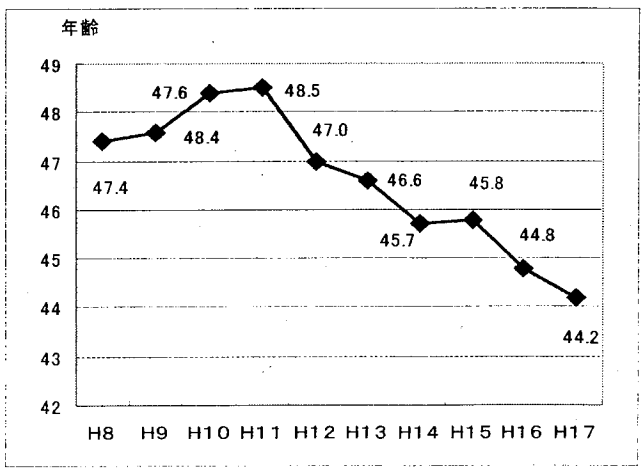
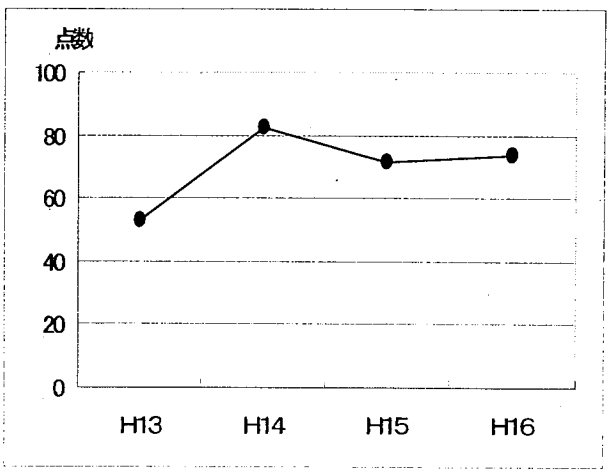


写真１３　酒造メーカー社長による講演

写真１４　網会社による講習会

表１　高価格取引魚種の割合

区　　分	６月	７月	８月	９月
全魚種数	34	35	34	30
佐々波が他の地区より上回った魚種数	21	22	22	16
割合（%）	61.8	62.9	64.7	53.3